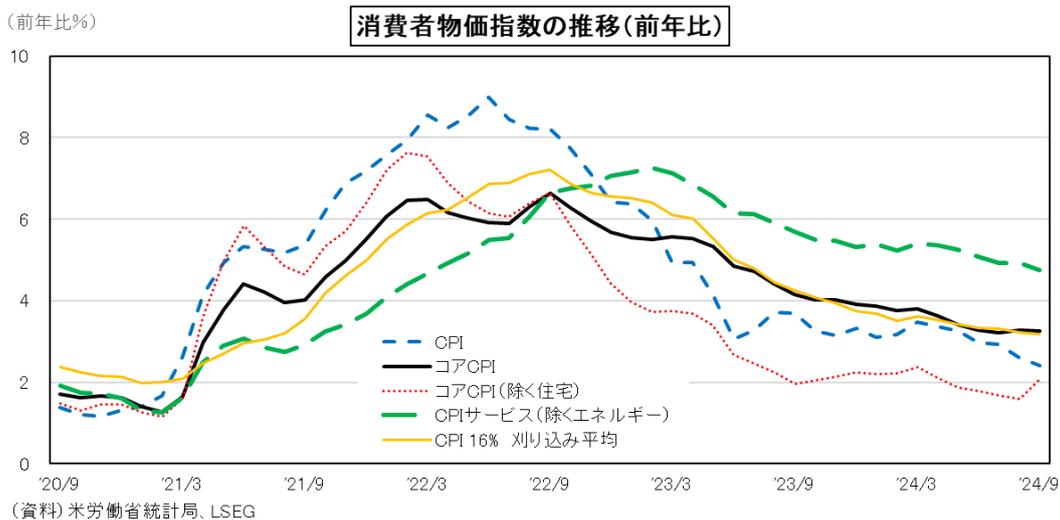
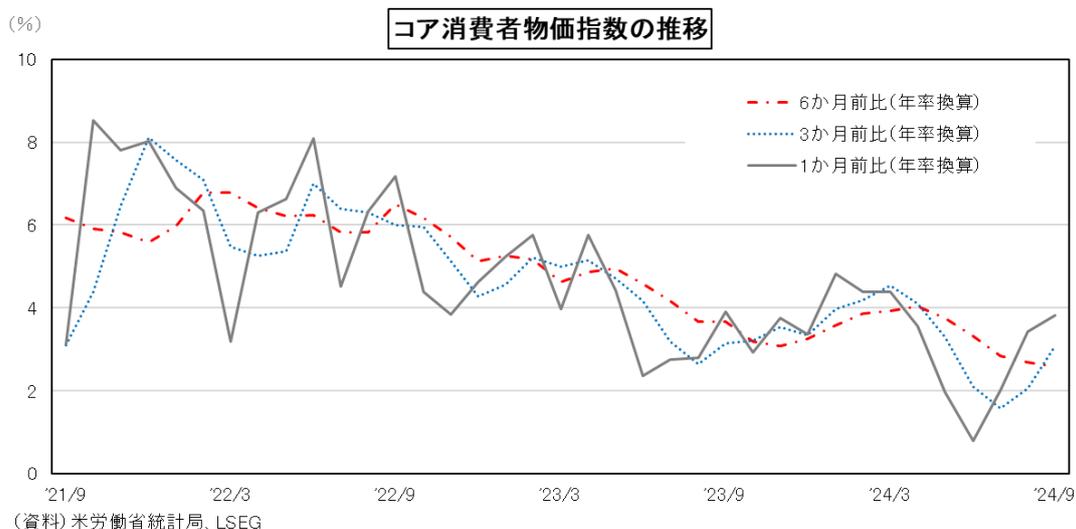


(米国)下げ渋りが見られた9月のコアCPI

9月の消費者物価指数(CPI)は、総合が前年比 2.4% (前月比は 0.2%)、食料とエネルギーを除くコアは同 3.3% (同 0.3%)となり、総合でみると約3年半ぶりの小幅な伸びにとどまったことでインフレ率の鈍化が確認された。もっとも、コアインフレ率の下げ渋りも確認された。エネルギーを除いたコアサービスの上昇率は8月から変わらずの前月比 0.4%となり、こちらも上昇率はやや高いといえるだろう。内訳をみると住宅費は同 0.2%、輸送サービスは同 1.4%、医療サービスは同 0.7%となった。



コアCPIについてより足元の動きを確認しやすい1、3、6か月前比(年率換算)を計算すると、9月はそれぞれ3.8%、3.1%、2.6%となり、24年半ばに鈍化傾向が強まったものの、最近は下げ渋りが確認できる。



9月CPIは、総合がインフレ率の鈍化傾向を示した一方で、コアでみると、あまりインフレ率の鈍化が進展していないことがうかがえる内容となった。こうしたなか、10日の債券市場では総合CPIがより重視されたことなどから、政策金利の予測との連動性が高い2年債利回りは前日比5.4bp低下の3.96%となった。なお、10年債利回りはほぼ変わらずの4.07%となった。一方で、株式市場では、CPIが予想を上回り、利下げペースが遅くなる可能性が意識されたことなどから、主要株価指数が下落した。こうしたことから、9月CPIの見方はまちまちといえるものの、FRBが(PCEデフレーターでの)コア区分を重視していることもあり、CPIについてもコアでみればあまり鈍化していないことには留意した方が良いでしょう。